



目次

- ・2012年度医療キャンプ寄稿文
- ・ダグラス・レポート（ルーネルド代表）
- ・キャンプ行程表・会計
- ・会からのお知らせ

活動予定

助成金申請状況

認定 NPO

支援金状況 etc



ゲム村での HIV 検査

東京大学医科学研究所感染症分野 菊地 正

今回、初めてケニアのゲム村での医療活動に参加させて頂きました。近年大きく変化しつつあるアフリカの HIV を取り巻く状況を、この目で見たかったというのが参加の動機でした。

この5日間の無料診療所は、HIV の検査が主要な仕事の一つであり、年1回だけの活動であるにも関わらず、この村で重要な役割を担っていることがわかりました。現在のケニアでは希望すれば無料で HIV の検査ができる VCT(voluntary counseling and testing)の施設が地方も含めてくまなく配置されていますが、山間部にあるゲム村の人々にとっては、最寄りの VCT でも歩いて1時間ほどかかるそうで、今回のような無料医療活動が唯一の検査機会であるという人もいました。とは言え検査目的だけに来る人はごく一部で、訪

れる患者の多くは風邪や腰痛、マラリアや寄生虫感染症などで、その受診をきっかけに HIV 検査を勧めるという意味で、VCT（検査を希望する本人が出向いて受ける検査）と PITC(provider initiated testing and counseling : 患者に医療機関側から勧めて受けさせる検査)の中間の位置づけという印象です。

なるべく多くの人に検査を勧めましたが、検査したばかりだから必要ない（よく聞くと4、5年前の検査だったりします）と言う人や、自分は大丈夫と言う人も中にはいますが、おおむね積極的に検査を受け入れ、意識の高さ（どちらかというとな性の方が高い印象）を感じました。また、すでに抗 HIV 薬を内服している人も少なからずおり、国の隅々まで抗 HIV 薬が普及していることを実感しました。

今回の経験で、HIV に対する意識は高まっているものの、特に農村地域では検査をいつでも気軽に



受けることは未だに難しいこと、農村部で抗 HIV 療法を受けられたとしても副作用や HIV に伴

う様々な合併症に対応できる医療体制はないことを痛感しました。

抗 HIV 療法をなるべく多くの HIV 感染者が受け、

感染者体内のウイルス量を下げることにより、感染伝搬を減らして、最終的に HIV をコントロールできるかもしれないという希望的な研究成果が出てきている一方で、より有効性のある予防対策と、感染症以外の疾病も含めた医療や検査体制の整備の必要性を感じました。

今回のゲム村で実際に患者さんと接するという貴重な機会を与えて頂き、アサンテナゴヤの皆様とそれを支えて下さっている皆様に感謝申し上げます。

寄稿文

順天堂練馬病院 総合診療科 山内 雅史

昨年に引き続き順天堂からは2回目の参加になったケニアボランティア活動。最初この話を受けたとき詳細は聞いていなかったが、自分の行ったことがない国、触れたことのない文化、またそこで行う普段仕事としている医療活動。詳細はわからなくても特別な経験、自分の価値観に影響を与える経験になることは間違いないと考えすぐに行きたいと希望を出した。

そして実際行ってみて感じたことは結論から言うと想像していたものはある程度正しかったが、やはり実際に目で見て肌で感じると想像の何十倍のスケールであった。そしてこの活動が多くの方の協力と努力により実現されたものであり、限られた期間、スタッフでできる最大限の貢献できる体制を整えての活動であることがよくわかった。それを感じた時事前にそれらを考えることもしなかったことにとっても申し訳ない気持ちになった。

ケニアにつきナイロビでの滞在中皆で物品の確認、買い出し、薬剤の袋の作成と袋詰め。地味な作業であるがこの活動の限られたスタッフ、物品皆で協力しなければいけない状況であることを象徴した行為であった。皆やる気にあふれ積極

的に動きやっていた。いい思い出になった。サファリに行けた事、沢崎さんや公文さんのケニアの実情や活動に関することや問題を直接聴かせてもらったこと、スラム街を実際に見学させてもらったことなどはとても貴重な経験になり二度と経験できない可能性もあるし、こんな経験は普通では絶対できないことでありこの経験はよく自分の中で噛み砕き理解し誰かに還元していく必要があると思いました。自分は報告を職場医局や後輩にすることで見てもらおうと思った。

ナイロビからキシーマまでのバスは本当に長かった。しかし、この貴重な経験を目に焼き付けておきたかったので1度も寝ようとは思わなかった。延々と続く広大な大地と自然、時々ある集落や放牧するマサイ族など全てが新鮮であった。長かったが飽きたという感覚にはならなかった。

そして讃岐さんや現地スタッフの方々と会ったが、彼らははっきり言って最高だった。とても楽しそうに接し HIV というケニアでは common でも serious な問題に対しとても前向きに活動をしているすばらしい方々と感じた。人のために生きる彼らの幸せとケニアの HIV の減少、患者が治療を受けられる体制が早くできることを強く願っている。

Gem East 村での診療をした5日間に関しては外来に関しては月並みなことしかできなかった

ように思える。患者がとらえる症状に関する表現の仕方や程度までも普段日本でやっている感覚とは違うだろうから言語だけでなくそういう違いも診療を難しくする要因であったと思われる。彼らも普段病院にかかることはないからどう伝えていいかわからないだろう。この活動が彼らにどうこの先貢献していくか考えた時、5日程度の診療ではその場しのぎの対応のみになるので慢性管理が必要な病態などは対応できない。それは未来へは残るものは極めて少ないだろうと言える。しかし、マラリアを発見し治療すること、HIVを発見し治療に結びつけその後の予防や他者への啓蒙につなげることは未来につながることである。つまり自分達の行為が将来を変えるきっかけになるということである。これはとても意味のあることだ。皆は当然のように理解していたことであるが、自分は恥ずかしながら活動の中でそれに気付いた。

外来診療は月並みと言ったが、その中で現地スタッフと共に会話した英語、少し覚えたルオ語を患者に話した時の笑顔が今でも印象的である。診察時の挨拶で Amousi, Amor kaneni, Nyinga en Masa は必ず言った。こんにちは、あなたに会えて嬉しいです。私の名前はマサです。という意味だ。これで笑わなかった患者はいなかった。言語はおもしろい。簡単な言葉であっても相手の言葉を使うだけで相手は親近感がわき、また自分を理解しようとしてくれる姿勢を感じる。外人が

日本語を使ってくると思わず自分も笑ってしまう。同じ事だ。この外来で彼らに対してできることは限られている。少しでも気持ちを伝えられるように考えた。

また同時に印象的であったのは子供達の笑顔である。スラムへ行っても、途中の道でも Gem 村でも必ず子供は笑顔で手を振ってくれた。まっすぐな思いでこちらを見つめ楽しい事に対する欲求の強さと物事を吸収していく勢いを感じた。日本の子供とはまた違うものを感じた。子供達と



触れ合う時間も多くとれとても楽しかったし、学ばせてもらった気がする。

ボランティア活動をしに行ったわけだが、結果彼らに与えられたものも非常に多かったように思う。医師として初心を思い出し、今後の診療に対してとてもモチベーションが上がった。ありがたいと言いたい。

最後にアサンテナゴヤのスタッフの方々、今回参加された先生方、石川さんや渋谷さん、讃岐さん、現地スタッフの方々に大変感謝と敬意の気持ちでいっぱいです。これからはチャンスがあれば参加させて頂きたいと本気で思っています。本当にありがとうございました。

ケニアに思いを寄せて

薬剤師 渋谷 伸子

第1回ゲム村無料医療キャンプに参加した会社の同僚である石川博司さんから来年の医療キャンプにはぜひ一緒に参加しませんかと誘われておりました。しかしながら去年は家庭の事情により参加することができず残念に思っておりました。

たので、今回の第3回医療キャンプには喜んで参加させていただくことにしました。

私にとってケニアとの出会いは中学の英語の教科書で、ずっと長いこと興味があった国です。教科書では「彼らは英語とスワヒリ語を話します。スワヒリ語の“ジャンボ”はこんにちはという意味です」というセンテンスがあり数十年経った今もその文章や挿絵を覚えています。また HIV に

関しては勤務するグラクソ・スミスクライン株式会社が抗 HIV 薬を開発販売しており、私自身 2001 年より 10 年程抗 HIV 薬の学術担当であったためたいへん興味を持っている疾患です。そしてその感染症が問題となっているケニアには機会があればいつか行ってみたいと思っていました。

今回、私は東京組ということで成田から出国して仁川へ飛び、仁川で名古屋組の皆さんとご対面をしました。同じ目的で集まった人達との出会いは私をわくわくさせ、さらにケニアへの期待に胸が膨らみました。そして仁川から 14 時間をかけてナイロビへ向けて飛びました。

ナイロビには早朝に着きホテルにチェックインするまで時間があるということで小型の貸し切りバスの車窓より街を観光しました。高層ビルの数も多く想像していた以上にナイロビは都会でした。ただ街中を走っている車を見るとトヨタのカローラの割合が最も多く、その車体はかなりおんぼろ、とても古い車両と思われそのような点はケニアがまだまだ発展途上であると感じました。

翌日、チャイルドドクター・ジャパンを訪問して公文先生よりケニアにおける医療制度、生活の状況、特に貧困のためスラムや孤児院の子どもたちのおかれている状況を拝聴いたしました。その後はスラムにも訪問させていただきました。スラムでは本当に多くの人達が住んでいることに驚



き、その毎日の暮らしが大変であることを目の当たりにしましたが、そのような環境の中でも子ども達は楽しそうに笑顔で遊んでいました。見知らぬ私達にフレンドリーに接してくれて本当に可愛かったです。私は日本に帰国してから微力ながらも子ども達役に立ちたいと思いドクターチ

ャイルドの支援に申し込みをいたしました。

2 日間ナイロビで過ごし、いよいよキシへ移動です。その移動はバスでほぼ 1 日かかりました。アフリカ、ケニアというと野生動物のいるサバンナを想像しがちですが、キシへ向かう窓から見える景色も医療キャンプを行ったゲム・イースト村も緑が多く、辺り一面畑という緑豊かな土地でした。

医療キャンプでは薬剤師として薬局を担当いたしました。薬局では 3 名の薬剤師で調剤・投薬を行いましたが、5 日間で医師からの処方箋が約 1100 枚だったので 1 日あたり約 220 枚の調剤を行ったことになります。1 日に 220 枚の処方箋は日本における処方箋と薬剤師数の員数を定める省令から言えば 5~6 名の薬剤師の配置となりますので、3 名でこなすには少々枚数が多かったことになります。そのような状況であったため診察を終えて最後は薬をもらって帰るだけのケニア人のみなさんには随分と待つて頂くことになりました。3 日目はホテルに戻る時間になっても薬剤交付が終了せず翌日にお渡しする約束をしてホテルに処方箋を持ち帰りました。夜に調剤を終了させ翌日に渡せるようにしましたがキャンプ終了まで受け取りに來なかった方も数名いらっしゃいましたので、きちんとその日の内にお渡すれば良かったというのが反省点であります。薬局では多くのケニア人が処方箋を持ってきましたので、処方箋を預かる時に日本の引換券のルールを導入しました。その理由は同じ名前の方がいらっしゃいまして、お渡しする時に違う薬剤を交付してしまう可能性があったからです。引換券のルールはおそらくケニア人には馴染みがないので多くの人にこれは何だろうと思われていたようです。薬局にはケニア人ボランティアが二人常任してくれていましたが、彼らも日を追うごとに薬剤に関しての理解が深まるようで薬の飲み方を通訳してくれるというよりも彼らがきちんと薬の内容を理解してケニア人に説明をしてくれて

いました。私自身は薬局では調剤業務を主にして
いましたので薬ばかりを相手にして他の部門に
比較して診察にいらしたケニア人と接すること
が少なかったように思います。これは仕方のない
ことですが、残念と言えば残念です。

出発前はケニアに行くということ、しかも観光
客が行くような場所ではないということで友人
や家族にも心配をされました。しかしながら、今
回が3回目のキャンプということで過去に携わっ
た皆様の経験をもとにいろいろと工夫がされた
部分が多々あり、私はたいへん快適に過ごせた
と思っております（強いて言えばやはりホテルのシ
ャワー、トイレなどの水事情は不便でした）。事

前にナイロビのホテルで薬剤や寄付する文房具
などの荷物整理、打ち合わせをして確認ができた
ことも良かったことであり、キャンプにおける昼
食に関しても温かいおいしいご飯がいただけ
たことは幸せなことです。今年もまた気がついた点
などを集めて工夫、改善ができれば来年は更に前
進することができると思います。

最後にケニアのゲム・イースト村における医療
キャンプ活動に参加し貴重な体験をさせていただ
いたことに心より感謝申し上げます。アサンテ
ナゴヤの皆さま、一緒に参加した皆さまには本当
にお世話になりました。次回もまたぜひ参加でき
ればと考えております。

3度目の正直

薬剤師 石川 博司

英語で手紙やメールの最後に「many thanks」
と書くことがある。とてもいい言葉だと思う。「た
くさんのありがとう」「感謝でいっぱいです」そ
の他日本語にすればいろいろな訳が出来ると思
うが、私の一番好きな英語である。この紀行文に
はそんな想いと、想いを果たせず来年に持ち越し
になった目標について書こうと思う。

過去2回、ケニアを訪れ「来年こそ満足できる
仕事をしよう」とキャンプが終わる度に反省した。
今年のキャンプの準備はいつもにも増して入念
な打ち合わせと準備を行った。薬局を預かる私と
しては、予測として1000-1200名の患者
を5日間で診療することを前提に、昨年の処方デ
ータを基に準備する薬剤の数量および処方パタ
ーンを分析し、「約束処方」（あらかじめ医師と相
談し汎用する薬の処方を決めておく）を用意した。
毎年、クリニックの運営で薬局が最も患者さんの
流れを止めている。「満足いく薬局運営」を実現
するために、薬局の布陣はいつもおなじみの讃岐
さん、今年は新たに同僚の渋谷さんが薬剤師とし

て参加してくれたので、薬局の人手は3人となり
昨年の1.5倍。「約束処方」の準備（キャンプ
前に参加メンバー全員で協力して薬の準備をし
て頂きました。感謝）、ルオ語・英語表記の薬袋
ラベルの作成。通訳は昨年と一緒に働いてくれた
ローレンス。「これで万全」とタカをくくってい
た・・・

しかしケニアは甘くは無かった・・・

またしても薬局は大混乱だった。次から次へと
押し寄せる患者さんたちの波にのまれ「アッと言
う間」に5日間のケニア医療キャンプが終わった。
毎日大量の処方箋と格闘し、ホテルに帰っては、
在庫チェックと補給、加えて途中で準備した薬が
底をつき始めたので結局現地調達、薬袋とラベル
も底をつき現地調達した。何とか乗り切れたが、
またしても満足のいく仕事はできなかった。

日本では企業に勤務するサラリーマンとして、
業務の企画立案および実行管理は日常的に行っ
ているし、それなりの自信もある。「仕事」に追
われるのは「準備不足」だ！と後輩に指導するこ
とも良くあった。今回、その自信とプライドはま
たしても崩れ去った・・・

情けないかな、忙しすぎてキャンプ中はゲム村

の雰囲気を楽しむ余裕もなく、疲労困憊でベッドに倒れ込む毎日。3度目のケニア、3度目の正直、「雪辱」はならなかった。

ビジネスマンとして悔しい限りである。3回の同じ業務を行って成功できなかった経験をあまり持ち合わせていない。しかも十分な計画と準備を行って（と思いこんで）さえである。「なぜ？どんな原因が？」と考えさせられる。結果から考えれば今年の薬局での患者数は1100名強と予測通り。昨年の1.5倍程度の患者数だ。マンパワーは1.5倍、手順の効率化、メンバーの慣れ、どれをとっても困難を予見する要素は無い。それでも尚、この混乱と疲労、「いい仕事」とは程遠い内容。今回のキャンプの準備は「ビジネス」で用いる問題解決法を多用した。昨年のデータと反省に基づき、手順の見直しや準備に様々な工夫をして楽々こなせるつもりだった。

ケニアのこの医療キャンプは私にとって今まで遭遇したことのないほど難しい仕事の様だ。次々に起こるトラブル、さばききれそうに思えない患者さんの数、疲労と体調管理の難しさなど、日本で整えられた環境でする仕事とは全く異なる。

そんな中でも、困ったところで助けてくれた、マリー、パパ、ママ、ローレンス、ジュマ、モーゼスたちの一族、恥ずかしがり屋のダグラス、癒しのフレッドなどの現地スタッフ。ホテルに戻ってみんな疲れきっているはずなのに、気持ち良く明日の準備を手伝って下さった日本からのメンバー。特に忙しい暑い暑い中で頭に血が上っている

ときに聞こえた「志村けん」・・・最高でした。フツと肩の力が抜けて周りを見渡す余裕が出来ました。こんな仲間たちの支えのおかげで無事に今年もキャンプの終了を迎える事が出来た。ケニアの村人だって薬局で待たされるのは、いい気持ちがするはずもない。それでもほとんど黙って待っている。（たまに騒ぐが・・・）



自分の不甲斐なさをたくさんの仲間と村人が許して、助けてくれる。本当にありがたい。

来年こそ「満足がいく仕事」を目指したいが、きっと来年もみんなが許して、力を合わせて、助け合う事になるだろう。

ケニアに来て気付いたことがある。それは日本の常識など通用しない。「計画の通り」進まないことが「当たり前」な世界なのだ。だから、ケニアの人は我々から見るとちょっとルーズに見えたりするが、他人に寛容だし、アドリブで対応できる。なにより一生懸命生きようとしている。他人を助けることは自分を助ける事でもある。日本で生活しているとこんな当たり前のことですら忘れてしまう。人間として忘れてはならない何かがある。来年も戻ってこよう。

たくさんの感謝とたくさんの満足を伝えるために。味わうために。3度で果たせなかったら4度でも5度でも。

Many Thanks

2度目の大地

石川 美里

春先に思わぬ誘いが、主人（博司）からありました。”今年も村と一緒にいくぞ”思わぬ言葉でした。正直2度とあの村に行けないと思っていたか

らです。観光地ならお金さえ払えばいけるけど、あそこはどうやっても自力では訪れる事の出来ない場所。おそらく一度きりの参加になるだろうと思っていたので思わぬ誘いにちょっと驚きました。”あの村の人達に会える”そう思うと9月が楽しみでした。実際2度目のケニアは、私の目に

違った発見をもたらしました。ナイロビのスーパーにいてまず驚いたのは、品揃えの充実した事。キシーのホテルはサービスが向上し、TVは薄型TVがおいてあった事。一年ぶりに訪れた町は経済が向上し、人々の生活が変わり始めることを予想させました。村はどうなっているだろうか？大きなマーケットができ、電気がきているだろうか？変わっていることを期待したり、そうでなく変わらぬ場所であってほしいと思う気持ちが交差しました。

今回は、村の近くの町キシーまで、ナイロビから陸路での移動をしました。途中リフトバレーを通り大地の大きさと地球の丸さを実感しながらの約6時間の移動。想像していた道は、悪路でしたが普通に舗装された道でした。安心しました。昨年とは違った景色を楽しみながらの移動では、遠足気分を味わうことができました。村の近くのホテルまで、順調にたどり着きました。そして翌日からは、楽しみでもあり過酷な5日間が始まります。”わくわくとドキドキ”のはじまりに高揚しました。



翌日1年ぶりの村に向かいました。訪れた村は、あの変わらない緑豊かな大地と人々で溢れていました。そして、

今回のキャンプは、前回とはすこし場所が変わっていました。テントも増え、3度目ともなるとかなり充実していました。ルーネルドスタッフも昨年みかけたメンバーが数名いました。回を重ねる事で、充実しスムーズに事が運ぶことが感じられました。裏方の仕事の合間に、採血後の結果Drにもって行く事を頼まれました。岩崎さんが”採血後何分後にここに来て”と口頭で伝えるも時計がありません。携帯が普及し始めているようで、それを時計代わりにしている人は多いですが多

くの人には時計がありません。思わぬ事でした。私たちは、何処に居ても時計を探せば時を知る事が出来ます。こんなちょっとした事が、ここには当たり前のようには存在しないのです。来年は大きな時計が、採血のテント前に飾られ人々に時を知らせることが出来たらと思います。今年は、体重測定が大人にも子供にも大人気だったそうです。体温測定では、ちびっには何をされるのかわからず痛くないのに大騒ぎ。先がとがっていて見た事もない物が、自分の腕にさされると思えば気持ちがわかります。そして、計測時間の1分がとても長い時間でした。担当したひろこさんお疲れさまでした。そして、素敵な笑顔で子供達に接している姿素敵でした。今年は、村のマーケットに行く事ができました。目的は”バナナ”を買う事。村に向かう途中で買う事もできましたが、出来れば村で買い物をしたいと考えました。マーケットは、毎週日曜と木曜午後1時からオープンします。キャンプも落ち着いた木曜の午後に、ルーネルドのメンバーと河原さんと買い物に出かけました。マーケットは、いろいろな物で溢れていました。スーパーのような品揃えはありませんが、最低限のものは手に入ると行った感じでした。あいにくこの日は、バナナの品揃えがなく、買う事が出来ませんでした。それでも昨年とは、違った場所を見る事が出来たのはうれしかったです。そして、5日間のキャンプは無事終了し、今年のキャンプを行った場所で記念植樹が行われました。この木々が大きくなる頃、この村はどんなふうにかわり、人々が変わらぬ笑顔で暮らしているかを想像すると楽しみです。現在、アフリカを一人旅中の河原さんがキシーで合流し、一緒に裏方の仕事を担当してくださいました。私一人では、まわらないところを随分助けて頂きました。この場をお借りして改めて、ありがとうございました。今回日本から旅を一緒にした皆様、いたらない事が多かったと思います。皆様の人柄と心使いに、大変励まされました。アサンテサーナ

二度目のケニア

琉球大学付属病院皮膚科 内海 大介

2011年に初めてアサンテナゴヤとともにケニアでの医療活動に参加してから一年が経ち、再び今年もアサンテのメンバーとともにケニアを訪問することができた。昨年のケニアでの医療活動は自分にとって初めてだったので、診療や体調管理などとても苦労した。2回目ともなればいろいろなことに楽に対応できるかと思いきや、そうではなく去年と同じくらいハードな滞在になった。改めて、ケニアでの活動の大変さを思い知らされた今回の訪問であった。しかし、個人的には軽い熱中症症状があったものの、ひどい下痢や発熱などはなく、無事に日本に帰ることができた。学生のころに頻繁に海に行き、キャンプなどをして雑菌にまみれながら生活していたことが幸いしたかもしれない。

今回の訪問でも、数多くの思い出ができたが、その中でも特に印象的であったのが、グレート・リフト・バレーであった。グレート・リフト・バレーを訪れるのは今回がはじめてであった。数百万年前に私達の遠い祖先は、このグレート・リフト・バレーの地で二足歩行を始め進化し、そしてアフリカ大陸を離れた後に、途方もなく長い年月をかけ極東の日本までたどり着き、日本人となったのであろう。今、自分の中にある遺伝子はこの地に生まれ、少しずつ形を変えながら、数百万年ものあいだに一度たりとも途切れることなく脈々と受け継がれ、自分に続いているのである。自分のルーツはこのグレート・リフト・バレーにあり、数百万年かけて自分の遺伝子が里帰りしたような感覚であった。このケニアに住んでいる人たちも、皮膚の色も文化もまったく異なるが、限りなく広い意味では親戚なのかもしれない。展望台に立ち、眼下に果てしなく広がるグレート・リフト・バレーを眺めていると、そのような思いに囚われた。

アサンテナゴヤのメインの活動である Gem 村での診療は、去年と同じか、それ以上大変であった。5日の間に多くの皮膚疾患を持った現地の患者さんが私の外来に来てくれて、皮膚科医として内科の先生方と同様に活動に貢献できたという満足感があった。しかし、一方でずらりと並んだ患者さんの列を見ると、これだけ医療が必要な地域にたった5日間の診療をしてどれだけ意味があるのだろうかという徒労感にも襲われた。今回の Gem 村での活動は、特に3日目に多くの患者さんが訪れ、非常に忙しかった。日本人ボランティアスタッフもケニア人の現地スタッフも、強いモチベーションと使命感を持ったひとばかりであったが、さすがにこの日の忙しさに皆疲労困憊して、燃え尽きてしまうのではないかと思えた。制限のある時間と人的、物的資源の中で、できる限り多くの患者さんに医療を提供する姿勢は重要だが、スタッフが疲弊して活動が継続不能にならないような体制を考えることもまた必要に思われた。Gem 村の人たちのためにこの活動を継続することが最も重要なことであり、そのためにはよりよい方法を考えなければならいのではないかと感じた。

今回は、井戸を掘るための予備調査である水質検査も行われ、幸い銅やヒ素などの有害な金属は検出されなかった。今後井戸の採掘の計画が進むかもしれない。このことはアサンテナゴヤの活動



の中でも大きな一歩になるのではないかと思います。今までの活動は主に、限定された期間のみに、日本から持ち込んだ人的、物質的な医療資源を提供することが主であった。しかし、井戸を掘り、水質の良い水が確保できれば、短期的ではなく持続的なサポートになると思われる。清潔な水は、種々の感染症を減少させることができるであ

ろうし、皮膚科領域に限って考えても、外傷の洗浄に持ちすることで重症化を防ぐことなどが可能と思われる。このことは我々が現地で行う医療活動と同じくらい、あるいはそれ以上に意味のあることかもしれない。

アサンテナゴヤのケニアでの活動は、年に1回の1週間という非常に限定された時間の中での活動である。この期間内でも多くの患者さんを診察し治療を行うことができるが、逆に言えば1年の残りの五十数週間という期間は、我々は医療的サポートを提供できない。1週間という医療活動以外に、現地に井戸などの有用な施設があれば、我々がいなくとも現地の方々にとって大きなサ

ポートになるのではないかと考えられる。

今回、1週間の医療活動でできることは非常に限られているということを去年以上に痛感した。また同時に、今後もこの活動を継続し、現地に必要な医療的ニーズを見出し、可能な限りそれを提供していくことが出来れば、現地での医療活動とともによりいっそう我々の活動が意味を持つようになるのではないかと感じた。

最後に、アサンテナゴヤメンバー、日本人およびケニア人のボランティアメンバー、今回の活動に関わりサポートしていただいたすべての方に感謝したいと思います。

今年もケニアと皆様に感謝

水谷 裕子

昨年に引き続きキャンプに参加することができ、今回は検査の他に受付のお手伝いを担当しました。受付といえば現地の方が最初に健康の不調を訴える場でもあり、言葉がわからない手伝いとは名ばかりの私を常時2名の現地スタッフが助けてくれました。マラリア患者であろうことを受付の時点で感知する応援看護師、身長体重や体温の測定が忙しそうだと見ると人を寄こそうかと提案してくれるルーネルドスタッフ、患者さんが訴える症状をさらに詳しく説明してくれる受付スタッフ、私は常に誰かに助けられています。その甲斐あって業務は比較的スムーズで、診療する先生方には随分なご負担をかけてしまいました。適切な受付の数は予め知らされていたので、これはきっちり守るべきものと反省しました。



村の住民の中には症状が改善されずたくさんの薬が欲しいと毎日通って来ら

れる元気な方も多々いらっしゃいます。ただ、そのような人たちも自分より後ろに重症の患者さんや緊急性の高い患者さんがいると判断するや「この人を先に診てあげて」と声かけしてきます。普段することなければ見ることもない自然な助け合いやその精神に失礼ながら驚き、そして感動してしまいました。逆に気がかりだったのは、そのような思いやりを持った人たちが、受付の番号札制の導入や受付人数の制限をアナウンスすると、番号札の奪い合いや診察を受けられないことに対する怒りで一触即発と言わんばかりの険悪な雰囲気になることです。限られた日数とスタッフなので適切な受付の数はもちろん守られるべきですが、そこには何の力にもなれない自分がいるばかりでした。

今回はマラリアの陽性率が高かったようです。言わずと知れたことですが健康状態は生活習慣に結び付くことが多いと思います。村でのホームステイ等を通じて村の人々がどのような生活をしているのか、わかっちゃいるけどできないこと・知らずにやってるやめなきゃいけない習慣などの課題を探し、健康な生活を送るのに優先的に改善すべきポイントはどこなのかを見極める活

動ができたと思っています。

そういえば、昨年検体紛失事件を起こしてしまったことから今年は検体管理には気を配りました。慣れない CD4 測定で手間取り検査はやりっぱなしになりがちでしたが、今後は検査を受けた

患者さんの名簿やデータの管理、医療廃棄物の管理にもっと積極的に取り組みたいと思っています。

皆様のおかげで今回のキャンプに参加でき、無事帰ってこられたことを心から感謝いたします。

ケニア渡航記

名古屋医療センター歯科口腔外科 菱田 純代

ケニアで医療キャンプを行っている事を聞いたのは、前年度行ったことのある先生（美濃和先生）からお話を伺ったのが始まりでした。「菱田さんすごく良かったよ」という一言で漠然と来年行けたらいいなあ、と思っておりました。何の思い入れもないですがケニアはたまたま高校時代より行ってみたいと思っていた場所であり、まさかそんなお話が出るとは思っても見ませんでした。私の反応を聞いたのか今度は内海先生から、ケニアでは歯科治療が必要な患者さんがおり、一緒に行ってもらえないか、と声を掛けて頂きました。元々私の所属している名古屋医療センターは HIV 拠点病院であるため、HIV-positive 患者の歯科治療はほぼ毎日おこなっており、私が行かないと、という勝手な使命感を持って今回同行することになりました。

日程は第二陣で行かせてもらうこととなり、強行スケジュールでの参加になりました。日本からインチョンを経由しナイロビについたときは朝の 5 時で、着いた実感はなくぼんやりと日本では見ない木々や大地を眺めておりました。ナイロビから kisii の村までは約 6 時間のバスでの大移動でした。この間の景色は大変素晴らしいものであり、昼になるにつれ日差しも強くなりますが、空は高く空気もきれいで草を食べている動物たちを見かけては写真を撮りまくってました。また、Kisii のナックマートは総合スーパーマーケットでしょうか。食料品から電化製品、衣類、薬局等

なんでも揃っており、スーパー好きな私は少し感動しました。電化製品を選んでもらう傍ら、絞めた鶏を買って帰る人もおり市場が近代化したような印象を受けました。

診療室はベッドと机、後は待合用の椅子が数脚あり、私の一举一動を凝視しつつ



数人待っておられる、という感じでありました。おそらく初めて歯科医を見たのだらうな、と思いつつ、汗をかきながらの診療でした。現地の方はルオ語、もしくは kisii 語であり、これには JUMA が通訳に入ってもらい診察をしておりました。とはいえこちらも英語が片言であり、何度も通訳をお願いすることになりました。また JUMA は大変優秀であり、他の場所で引っ張られ不在になることがあり、患者さんと私と看護師の玉木さんという困った事態になることもたびたびありました。その時は予め聞いていた、ヨドギ（口を開ける）、ベラベラモース（落ち着いてリラックスして）などと簡単な言葉と、私の必殺技ボディランゲージを駆使して主訴を聞き出す、という方法を使いました。

いざ始まった歯科治療は主にセメント充填と抜歯でした。歯科治療は切削器具を用いて金属の詰め物を作製したり、歯を削ったりする事が多いのですが電源を必要とします。そのためここでの可能な治療といえば、上記の二種だろうと焦点を当

て準備を行ってきました。実際始まってみるとう蝕により歯牙が崩壊し、やむなく抜歯を選択せざるを得ない患者さんが多く見られました。日本であれば削って薬剤を詰めれば歯牙を残せるけれども、それはここでは不可能でありもどかしい思いもありました。日本での歯科治療は何もかも整った環境の中で可能であった医療であり、歯科治療の限界を知り自分の知識を総動員させる、という経験をさせて頂きました。

合計5日間で診察した患者さんの人数は130人(延べ人数)その中でHIV-positiveは6人と陽性率4.6%でありました。全体的に内海先生から聞いていた通りう蝕(虫歯)が多く、また歯科治療は大変高額であるため診察を受けない方が多く見えます。歯周病で歯牙に動揺を認めてくるようであれば、推測ですが、自分で抜去したりしているのではないかと思います。特に臼歯部でのう蝕が多いような気がしました。私たちがいつも身近

にある砂糖を使用した菓子はあまり見かけないため、原因はよくわかりませんが、前歯部や歯間部のう蝕はあまり見かけなかったことから歯ブラシを使用しない歯口清掃も一つ要因であると思われる。ただ歯に関心がないかというところでもなく、言葉が通じないのにも関わらず子供の歯並びや治療について熱心に細かく聞いてくる母親も多かったと思います。

この5日間は忙しいといえども、機中より毎日美味しい食事をたくさん食べていたためか帰国に近づくにつれ消化不良を起こし、最後のお食事はキャンセルすることになってしまいました。朝晩と日中の気温差は大きく、体調を崩しやすいといわれる中、単なる食べ過ぎの消化不良で終わって一安心でした。来年はもっと効率的に診療できたらいいな、などと帰りの機内で考えておりました。また来年も来られるように、上司をお願いしておこうと思います。

ケニア無料医療キャンプを終えて

名古屋医療センター 鈴木 純

静岡がんセンターでの2年間の感染症フェロシップを終えて、2012年4月古巣の名古屋医療センターに戻ってきた。名古屋医療センターではHIV診療も行うこととなり、そのチームの懇親会の場にて、内海院長からケニアの無料医療キャンプについてのお誘いがあった。静岡に行く前から、このキャンプの存在は知っていた。後輩の医師でもすでにキャンプに参加しているものもいた。私には縁のない話だと思っていたが、感染症の勉強をしていくなかで、旅行医学や熱帯医学という領域は必ず知っておくべき内容であることはわかったし、静岡の研修では経験できていない内容であった。ケニア行き話を聞いたときには、アフリカなど行ったこともないし、安全なのか？予防接種は？いくらかかるのか？などいろいろと考

えてしまったが、その一方でケニアで診療できるということはチャンスだと思い、ケニア行きを決意した。

準備は入念だ。予防接種はDPT、A型肝炎、髄膜炎、腸チフス、ポリオ、狂犬病、黄熱。金鳥・フマキラー(蚊対策)の準備はもちろんのこと、メフロキンの予防内服もした。あとは言葉の問題。診察のときにはtranslatorが現地語を英語に通訳してくれると聞いた。英語での診療も正直自信がないのに、さらに現地語とは二重の壁である。通勤の自動車内では英会話のCDをずっと流していた。ケニアに行く直前は、希望や期待よりも、不安と緊張のほうが勝



っていた。メフロキンのせいかもしれない。

いざ出発。木曜日：病院の当直→金曜

日：夜自宅に帰宅して準備→土曜日：名古屋→成田→成田発，日曜日：朝ケニアナイロビ着→タキシ郊外のホテル着→月曜日：診療開始というなかなかのハードスケジュールである。

診療が始まった。慣れない英語を駆使して、History & Physical での勝負。基本的に検査はできない（マラリアキットと HIV キットのみ）。主訴の多くは頭痛や腰痛などで対症療法が中心であったが、マラリアや寄生虫感染を疑うような患者さんもいた。できるだけたくさん患者さんに HIV 検査を勧めた。世界の三大感染症：HIV、結核、マラリア。ケニアでも、やはりこれらの感染症が大きな問題であることがよくわかった。キット検査での診断だけではあるが、マラリアや

HIV の患者さんはたくさんいた。結核の診断はできなかったが、病歴のなかでは結核既往のある患者さんも多い印象があった。HIV については予防や検査の啓蒙が改めて重要だと感じた。

とても多くの患者さんがいて、それを限られた資源のなかで診ていかなければいけない。そういった状況のなかでも、声をかけ助けて下さった参加メンバーの方々にはとても感謝している。現地スタッフの方々はとても親しくしてくださったし、translator は自分のつたない英語を忍耐強く現地語に訳してくれた。

本当にいい人ばかりだった。またチャンスがあれば是非行きたい。そう思えるよい経験であった

夢であったケニア無料医療活動に参加して

東洋医学総合はりきゅう治療院 一鍼
児山 俊浩

2012 年 9 月 13 日(木)～24 日(月)、特定非営利活動法人アフリカ支援アサンテナゴヤ主催で、アフリカケニアの無医地区へ医療チームを組んでの第 3 回無料医療活動に参加させて頂きました。メンバーは、医師 6 名、歯科医師 1 名、看護師 3 名、検査技師(獣医)1 名、薬剤師 3 名、鍼灸師 2 名、スタッフ 3 名の総勢 19 名でした。

私は、微力かもしれませんが東洋医学でやることは必ずあると信じ、鍼灸師として開発途上国の方々へのボランティアをしたい！という夢を持っていましたが、鍼灸師が海外ボランティアを行える道はいくら探してもみつからない状況でした。そんな中、(一社)愛知県鍼灸専門師会にて、アサンテナゴヤ理事長の石川佳子先生がケニア無料医療活動の鍼灸師参加募集をされており、それがきっかけで私はこの活動に参加させて頂ける機会に恵まれました。

訪れたケニアの GEM EAST 村は、電気も水道

もなく、きれいな水の汲める井戸もない無医村です。そして、総人口は 5～6000 人で HIV 感染症罹患率が非常に高い農村地です。経済的に貧しい地区で病院はなく、他地区への病院へ行くこともできない状況です。また、外部からの情報が入ってこないため、医療情報も乏しく、命を落としてしまう危険性が高いのです。

この村で 5 日間の医療キャンプを行いました。患者様は受付から、内科、感染免疫内科、小児科、皮膚科、歯科、鍼灸へ必要な場所で診療を受け、必要であれば採血、薬局へ行かれます。鍼灸には直接受付から来られる方と、内科、感染免疫内科、小児科、皮膚科で診察を受けてから鍼灸へ来られる方がいらっしゃいます。鍼灸では、石川先生と私の 2 名で鍼灸治療を行いました。ドクターの先生から鍼灸へ多くの患者様を誘導して頂きました。症状は、腰痛、肩・背部痛、胸痛、膝痛、頭痛、足背・足首痛、頸・後頭部痛、腹痛、下肢痛、腕・肘関節痛、めまい、眼科疾患、生理痛、むくみ、冷え、呼吸の苦しさ、右半身麻痺、下半身麻痺、歯痛、便秘、咳、中耳炎などで、鍼灸師 2 名で 124 名の患者様を治療させて頂きました。なか

でも、とても印象深かった方々が3名います。一人目の方は、2005年に事故で下半身麻痺となった車椅子の男性で、強い両下肢痛と腰痛を訴えていらっしやいました。この方に、鍼治療させて頂いたところ、両下肢部と腰部の痛みが消失し、車椅子の男性は大変喜んでくださり、握手をさせて頂きました。この時の笑顔は、本当に嬉しくて鍼灸師としてここへ来てよかったと思う瞬間であり、この先も忘れることはないでしょう。

次に二人目の方は、両足底の尋常性疣贅(イボ)から二次感染を起こしているとみられる女性の方です。両足が腫れ上がって、



足底を中心に感染が進行しており、右足の第2指～第4指足背側の中足指節関節、近位・遠位指節間関節周囲には、膿が溜まっている状態でした。まるで象の足のようで、日本での鍼灸臨床では診ることがない疾患でした。ドクターの先生の治療後、鍼治療を行いました。腰痛、両下肢痛、腹痛も患っていて、鍼治療後は腰部、両下肢部、腹部の痛みが消失しました。そして、感染症の両足の患部は、できるだけことは精一杯やろうと思い、全身の鍼治療の後、灸治療を行いました。その結果、膿の部分が少しだけ渴いてきたのが確認できました。わずかのことでできませんでしたでしたが、現地での疾患の現実を目の当たりにした気持ちでした。また、予防や対処方法をお伝えする必要性をとて強く感じました。

そして三人目は、夜に咳と呼吸が苦しい2歳の男児です。初めて鍼を受ける怖さもなく屈託のない笑顔で、体に刺入せずやさしく皮膚を摩擦する「小児はり」を施しましたが、目がトロンとなっていて気持ち良さそうにしていました。村の子ども達の死亡率も高いと聞いておりましたので、元気に育ててもらえればと願いながら治療させて頂きました。鍼灸は、一本の鍼と一捻りのもぐさがあれば、どのような場所でも行えます。自然で体

にやさしく自己治癒力を向上することのできる鍼灸のありがたさをあらためて感じました。

片道3時間以上もかけてキャンプ地まで歩いて来られる村の方もいらっしやるということで、鍼灸ブース内の気温は38～40度、湿度は75%という中、熱中症様症状になりながらもお一人でも多くの方にという思いで行わせて頂きました。その疲れもあってなのか、3日目の医療キャンプに行く日の深夜3時頃から38.6度の発熱、嘔吐、下痢症状が出て、食中毒でダウンしてしまいました。私は、3日目の医療キャンプはお休みとなり、とても悔しい思いと、皆様にご迷惑をお掛けしてしまいました。その日は一日中、スポーツドリンクと水しか飲めず、頭痛、腹痛、めまい、腰痛、倦怠感でベッドから立ち上がる事すらできませんでした。でも、こうしてはいられないと思い、朝晩と次の日の朝と自身で鍼灸治療を行い、処方して頂いたお薬を服用し、なんとか一日で復活することができ、4、5日目の医療キャンプに参加することができました。

今回アサンテナゴヤ鍼灸部門として新たな試みを行いました。そのために、鍼灸部門で様々な作成物を作っていました。まず、鍼灸治療時のコミュニケーションを取るために、日本語、英語、ルオー語 or スワヒリ語による鍼灸治療用フレーズ(会話、体の単語)の表を活用しました。そして、ルオー族の生活背景や疾患の原因となるものが見えてくればと思い、鍼灸用の問診表を活用しました。さらに、鍼灸治療後の効果の評価についても今回得ることができました。そしてまた、日常の健康管理のために、家庭でやって頂ける小児はり教室(対象は子どもだけでなく、大人も対象を含む)の開催をしました。使用する小児はりは、爪楊枝を10本束ねて輪ゴムで止めたもので、現地にある材料を使って代用できるというものです。医療キャンプ4日目の終わりに施術の流れとツボのテキスト、爪楊枝の小児はり全員にお配りし開催しました。教室は約40名の参加者があり、と

でも和気藹々とした楽しい時間となり、ジェスチャーを交えながら行いました。医療を提供できる期間は限られていますので、普段から自分の体は自分で守るという気持ちを持って頂き、日本の伝統的な『小児はり』が家庭で身近に行われ、日々の健康管理の意識付けに繋がることを願っております。そして、新たな自立支援の第一歩となれば本望です。今後の活動に、少しでも繋がればありがたいと思います。

村の子ども達は、すごくかわいくて目がキラキラしていて、たくさんコミュニケーションをとってきました。私は 15 年間ボディビルを趣味で続けてきましたが、子ども達に「マッスルマン」と呼ばれ、一緒にポージングをしたり、片腕に 2、3 人ずつ子ども達がぶら下がって遊びました。私自身、本当に楽しくて、言葉が通じなくてもすぐ仲良くなれ、このために日々鍛えてきたんだな位に思えてきました。日本の子ども達のように物は多くないけれども、ケニアの子ども達は生き生きと輝いていました。純粋な姿に、感動しっぱなしでした。そして、日本の皆様からお預かりしました文房具は、GEM EAST 村の全校生徒に一人一人手渡しさせて頂き、シティコウトンベンドンスラムの孤児院へは特定非営利活動法人チャイルドドクター・ジャパンを通じてお渡しすることができました。子ども達の笑顔がとても印象的でした。心より感謝を申し上げます。

別の日には、ナイロビにあるシティコウトンベンドンスラムへチャイルドドクター・ジャパンのご協力を受け、伺わせて頂きました。そこでの人々の生活の光景は、私にとりましては衝撃的でした。小さなトタンの家に、何人もの家族で生活し、上下水もなく、食糧も限られ(平均 1 日に 1 食)、とても貧しい日常がありました。そういう中でも子

どもを育て、なんとか生活をしている姿がありました。私は、回っている間に言葉が出なくなり、自分の無力さを感じていました。そんな中でも、子ども達は明るくて、私の方が元気を頂いてしまいました。

今回、活動に参加させて頂きまして、素晴らしいメンバーの方々と出会い、医療チームとして連携をし、そして、たくさんの刺激を受け、大きな学びとなりました。このメンバーに加われたことをとても誇りに思います。GEM EAST 村で、植樹した苗木のように、子ども達をはじめ、村の人々が皆、すくすくと元気で幸せであることを心より願っています。

最後に、ケニアの支援活動をされている JICA 沢崎博士には夕食会でケニアの経済状況や GEM EAST 村の就業、子ども達の教育・識字率、平均寿命、乳幼児の死亡率についての状況等を教えて頂きましてありがとうございました。ナイロビで病院を運営し、主にスラムの子ども達の医療援助活動をされているチャイルドドクター・ジャパンの公文先生、宮田様をはじめ関係者の方々には、ケニアの社会情勢や活動内容を



教えて頂きましてありがとうございました。現地 NGORUNELD の Mary、Douglas はじめ関係者の方々には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。そして、石川先生、内海先生、岩崎様はじめアサンテナゴヤの関係者の方々には、このような貴重な経験をさせて頂きまして、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。厚く御礼申し上げます。

「第 3 回ゲム村無料医療キャンプに参加して」

久美愛厚生病院地域保健課看護師 岡本 裕子

むらさき色のジャカランタの木を目にした時、

ケニアに来た！！と実感しました。3年ぶりです。今回、第3回ゲム村無料医療キャンプに参加させていただきありがとうございました。

前回までの参加の空路は、ドバイ、カタール経由でしたので、日本を出発するのは23時過ぎでした。そして、ナイロビのホテルに着くのは翌日の夕方です。その日は夕食をとり眠るだけでした。今回は、大韓航空で昼の出発でした。ナイロビに到着したのは翌日の朝5時30分です。飛行機の中で良く休めたせいか比較的元気でした。それから、ナイロビ市内のビューポイントを経由してホテルへ。この日の午前中はスーパーマーケットで必要物品を揃え、午後からはキャンプの準備、ミーティングと以前には無かった充実した時間が過ごせました。この時間の流れは良かったと思います。

15日はチャイルドドクタープログラムの見学で公文先生のお話しとスラムの見学をさせていただきました。午後はナイロビナショナルパークで動物を追っかけて楽しい時間を過ごしました。これから始まるキャンプを頑張れというご褒美と思っています。

16日は、ナイロビから宿泊地であるキシへの移動です。大地溝帯を通り、見覚えのある景色に癒されながらの楽しい移動でした。

17日、いよいよキャンプスタートです。私は受診する小児全員の体重測定と検温を担当しました。これが思った以上に大変でした。なぜかというと、ほとんどの子供たちは初めての体重測定、検温だったからです。体温計を見ただけで逃げて行く子、泣き出す子、緊張のため体が硬直し体温計を落としてしまう子、くすぐったいと言って体

をクネクネする子、中にはニコニコと可愛い笑顔で癒やしてくれる子もいました。途中からは掛け持ちが大変になり、体重測定は佐野さんや現地のボランティアさんに助けていただきました。体重測定はなかなかの人気の、その日の受付、小児の体重測定が終わると体重計はみんなのアイドルになっておりました。

今回のキャンプに参加させていただいて感じた事、考えた事を少し。毎日多くの患者さんが来て下さいました。でも、この環境(車など人を運ぶ手段がほとんどなく、ほぼ全員が徒歩で来ている)では、このキャンプまで来られない住民も多いのではないかと思います。来られない住民の中にこそ問題を抱えた方がみえるのではないだろうか？マラリアの罹患率も高いと思います？ここで暮らす人達はどのような環境でどのような生活をしているのか実体がわかりません。ですから、出来ることなら家庭訪問をしてみたいと思います。取りあえずは情報収集からですが？



それから、正しい情報が伝わりにくい環境のため、防げるものが防げない状況です。正しい情報を伝え、予防教育を充実させることは近い将来の夢の1つです。が、内海先生より3年後ぐらいには、この地にそれなりの建物を作りオフィスを構えたいとお話があり、私の夢も叶いそうです。ゲム村の自然環境を損なうことなく、人々が健康で暮らせるようお手伝いをさせていただけることがあればと思います。ありがとうございます。

ケニアでの素敵な出会い

“たまちゃん” こと玉木 奈美枝

私をケニアにと、声をかけてくださったのは内

海先生でした。きっかけは病院が発行しているたよりを読ませて頂いたのが始まりです。ある月号に内海先生の書かれたページが目にとまり、読ませていただいた私はなぜか涙が止まりませんで

した。心が弱かった私の心にずっと寄り添う感じで先生の文章は入ってきました。いろんなことに自信がなくこのまま看護師を続けて行けるかなどさまざまな思いや気持ちを、恐れ多くも先生に聞いてもらいたいとお願いした時でした。先生は忙しい中、一職員の私の為に時間を作ってください、話を聞いてくださいました。『ああやはり先生は優しく紳士な先生だなあ』と話し終えた後に思いました。そんな私に先生は『よし、一緒にケニアに行こう！』『…。』私は一瞬何を言われているかがわからずそのまま聞き流してしまい、日々の仕事と生活におわれていました。

4ヶ月ほどして外来師長から『院長先生に呼ばれているから行って来て』と声がかかり、『うわあ～何か呼ばれるようなことしたっけ…』と緊張しながら先生の部屋に入って行きました。『ケニアに行こう！いいね！』『…。ん！ケニアあああの時誘って頂いたのは本当だったんだ』それにしても勤務を休むことになるから行けないと思っていたら『もう外来の師長には言っているから大丈夫』との返事。『でも海外へ行った事がないですし…』『大丈夫！一緒に行ってみよう！』何処からその大丈夫って言葉が出てくるのか不思議でなりません。この私に何が出来るのか、もし行くとしても一緒に行かれるみなさんに迷惑をかけないだろうか、ましてや海外が初めての私に…。不安一杯の毎日でしたが、岩崎さんを初め沢山の方のアドバイスもあり、出発に向けて準備していききました。

セントレアで初対面の方達と緊張して挨拶したのを覚えています。初めての機内食、ソウルに着いた時『うわあ～初めて海外の地に踏み入れたよ』って感じ。スーツケースには会から預かったアルファ米やノートやたくさんのボールペンなどがあり、重さの関係でボールペンはリュックに入れて行こうと思ったのが間違いでした。手荷物検査でピンポン♪あれ？何が鳴るんだろう…。リュックには服や化粧品や…たくさんのボールペ

ン…。このボールペンがたくさんなので鋭利なものに写るのだそう…。みんなも一緒に検査に付き合ってもらって…『ああ最初からみんなに迷惑かけちゃった…。』

ソウルから乗り継いでナイロビの地に降りたのが9/14の4:30。辺りはまだ薄暗く迎えに来てもらったバスに乗り込み、ナイロビの街を見渡せるビューポイントに連れて行ってもらいました。

『うわ～ビルが高い～。街だあ』って…。だってケニアといえば赤道直下だからたくさんの砂漠をイメージしていました。ホテルに着いて朝食…。あれ？機内で朝食取ったような…まっいっか～おいしく頂きました。朝食を食べた後マーケットで木彫りのサラダ用フォークとスプーンセットをGet…。すっごく楽しかったあ～。英語が苦手な私にお買い物は出来ないだろうと思ってたのに、みなさんのおかげで私も『プライスダウン』と言い続け、楽しくお買い物が出来ました。その後会議室でみなさんのスーツケースに詰めてきた薬や湿布や食料、文具を整理しました。どうやって入れてきたの？と思うくらい出てくる出てくるって感じ、広い会議室を借りたのにあっという間にいっぱい並びました。その中でもびっくりしたのが岩崎さんの持って行かれたセーフティボックスです。スーツケースくらいの大きさのものなのに上手に詰めてきましたねと感心。さあいよいよ医療キャンプって感じです。

次の日にチャイルドドクターのお話を聞かせてもらって、細身の公文先生の志は強く素敵でした。とても勉強になり、そして自分の知識不足に恥ずかしい気持ちになりました。その後にスラム街を見学させていただき、心がつぶれそうな気持ちでした。しかし、こんな環境なのに子供達は屈託の無い笑顔でこちらを向いています。かわいい！

次の日にキシヘ向



けての出発です。バスで7～8時間かかる予定だ
って。バスが苦手なのに……。前の席にさせて
もらってようやくホテルに到着です。ホテルとい
うよりコテージみたいにかわいい感じでテン
ションがあがりました。そして夕食もおいしい！
食事が美味しくてよかった。ケニアに出発する前
に海外がはじめての私に食事のことを心配して
くれた人たちから預かった携帯食や豆などはお
つまみにさせてもらいました。いよいよ明日から
医療キャンプです。私にできることがあるのだろ
うか不安とドキドキでベッドに入りました。

目覚めは『コケッココー』と。なんて清々しい
朝なんでしょう。最近にわたりの鳴き声で起きる
なんてないことです。しっかり朝食をいただきゲ
ム村に向けて出発です。またバスに揺られてです。
舗装している道はあっという間にガタガタ道に。
ドライバーのテクニックで大きな穴が開いてい
る道を上手く通り抜けることが出来たときのバ
スの中は歓声で盛り上がりました。楽しい！バス
は緑豊かな地に入っていきました。素敵！と思っ
た瞬間涙が流れていました。あれ？あれ？なんで
だっけ？自分でもわからなかったその瞬間を内
海先生に見られてしまいました。しまった！でも
本当に緑豊かな地を見て心があらわれる気持ち
になりました。その素敵な緑豊かな地をみてなぜ
か実家を思い出してしまいました。実家は雪が深
くて寒くて不便できらいでした。それなのに実家
を思い出すなんて……。ちょっとしゃくな気持
ちになりました。でも石川さんに『どうして玉木
さんは新潟から名古屋に出てきたの』と聞かれ
『キライだったから』と返答。すかさず石川さん
は『出てきてくれたおかげでこうして出会うこと
が出来たのね』と言ってくださいました。素敵な
出会いに感謝しなきゃ！です。

ゲム村に着いて診察の準備のため TENT を張り、
牧師さんの言葉で始まりです。すばらしい牧師さ
んの言葉だったろうに……。英語が聞き取れな
い私はわからないままでした。友達から借りたス

ピードラニングの試供品の付け焼刃ではダメ
でした。誰か私に通訳してよ～。今度行くチャン
スがあればもう少し英語を聞き取れるようにし
ておかないとすばらしい言葉も聞き取れないな
んて残念でなりません。医療キャンプでは歯科の
介助をさせてもらいました。歯科はまったく経験
がないので最初は先生の足手まといにしかなり
ませんでした。そんな私に先生はまさに手取り足
取りでした。歯科担当の現地スタッフは働き者で
やさしく声を掛けてくれます。朝は必ず『昨晩は
良く眠れたか、体調はいいか、腰は痛くないか』
と、気遣ってくれます。そのスタッフは楽しそう
に私に話しかけてくれます。でも英語が苦手
で……。それでも話しかけてくれて“もう！私
に話しかけてくれてもわからないよ～”思わず日
本語で『わからないね』と。そしたら素敵な笑顔
で『わか ないね！』と日本語でかえってきまし
た。ある日皮膚科の先生が処置のために歯科のベ
ッドを貸してほしいとのことで私もお手伝いを
させてもらいました。私は泣き叫ぶ子供の足が動
かないよう押さえて『大丈夫！大丈夫！がんばれ
がんばれ！』と、大きな声での日本語……。気
持ちは通じたかしら～。素敵なスタッフと優しい
先生に囲まれながらの8番テントでした。あっ
という間に5日間の医療キャンプは終わってしま
いました。本当にあっという間で、日本に帰ってき
たときは飛行機雲を見たり、外国の方を見かけた
ときは懐かしい想いになりました。

今回ケニアに行く機会を与えてくださった先
生に本当に感謝しております。初めての海外であ
るためたくさんの方に心配や励ましの言葉をい
ただきました。そして、素敵な出会いがたくさん
ありました。笑顔が素敵な子供たち、気遣ってく
れる現地のスタッフ達、私たちがナイロビに着い
てからずっとドライバーを担当してくれた方、そ
して、今回一緒に日本から参加されたスタッフの
方たち。しっかりとした言葉が見つかりませんが、
いろんな生活があり、国があり、その中で日本は

恵まれていることを思い知ることが出来ました。恵まれている地に生まれた私は心も豊かになりたいと感じました。ゲム村の素敵な方たちのよう

に。また、行く機会がありましたら今度は医療と言葉をしっかり勉強して是非参加したいと考えています。本当にありがとうございました。

ゲム村無料医療活動に参加して

看護師 日比野 福代

去年に続いて2回目の参加をさせていただきました。ナイロビで2日間、薬や文房具等の前準備と打ち合わせを行い、お互いの情報交換ができた。チャイルドドクターの公文先生のケニアの事情をお聞きしながら、私たちが疑問に思っていたこと等がすんなりと耳に入り、ケニアの子供事情や医療の現状を細かくお聞きすることができ、厳しい現実があることが分かった。わずかな時間を利用して、現地のナショナルパークでキリンなどを見て、ゆったりした時間をすごしました。スラム街を見学したことも衝撃的だった。スラムの生活を見て、この場所しか知らない子供たちを、少しでも手助けしている人たちの活動を見て、何かしなければいけないような気持ちになりました。ナイロビで2日間を過ごし、ナイロビより去年と違い舗装された道のりをバスで陸路を横断していくこと6時間、「さすがにアフリカの大地を走っているんだ」と思わせる光景、牛や羊が放牧されており、周りでのんびりと見守っている現地の人、マサイ族の民族衣装を纏った人々など、大地の生活を営んでいるのを目にしながら、キシーのホテルへ到着しました。去年の体調を崩してしまったことが、ついこの前のように思い出されて、大変だったことを懐かしくメンバーが倒れたことを思い出しました。

今回の医療活動の始まりです。ゲム村には前回より、車も乗り心地もよく、道を変更したため長く感じない道のりを往復する生活が始まりました。現地の方々やルーネルドの方、ボランティアの方々が協力していただいて、テントも一つ増え

て快適に順調に仕事を始めることが出来ました。今回も日差しは日中は強く夕方になると、長袖の方がいいかなという気候でした。夕方になるとスクールになり雨が降るせいかケールやとうもろこしがよく育っていました。私は採血担当で、最初の日はやや少なく、日を重ねるにつれて HIV 採血とマラリア採血に休む暇なく担当をさせていただきました。病気の方ではないため、皮膚の弾力があるため採血には、さほど苦勞はしませんでした。子供のマラリア採血には大きな目からあふれるほどの涙が出てくるときは、とてもつらいですが、何とか頑張って仕事を終えることが出来ました。現地の子供たちとゆっくりする遊ぶ暇もないほど採血に追われましたが、充実した医療活動でした。

医療活動を終了して、パ



パの家で最後のバーベキューをご馳走になり、楽しく過ごしました。翌日からお腹がゆるくなり、すぐ、トイレに走ることになりました。ほんの少ししか食べてないのに、こんなに体調を崩すものかと、自分ながらデリケートなことに驚きました。帰国後も数日は体調が回復せずにやせてしまいました。

今回の医療活動に参加できたのも、全員がボランティアに参加したい意欲と、理事の方々の協力があり無事終了することができ、来年は、現地の方々との交流会などが出来ると生活状況がわかるのかなとおもいました。本当にありがとうございました。

2012ケニア ゲムイースト村

フリーメディカルキャンプを終えて、

アサンテナゴヤ役員 佐野 考宏

こんにちは、私自身今回が2度目のケニアでした。一度目は2010年 第一回目の医療キャンプに 2日間だけ ご一緒させていただき後半はナイバシヤ湖やケニア山の見えるナショナルパーク サファリで ケニアの大自然や動物 ケニア人ホテルスタッフのサービスに触れケニアが大変気に入って大好きな場所となりました。帰国後は もしも またケニアをおとづれることができるのなら、今度は 無料医療キャンプに全日程帯同し 日本人ドクターや鍼灸師 薬剤師のみなさん また 現地ケニア人のボランティアスタッフのお手伝いが なにかできたならば、、、と 考えておりました。もちろん 無医村のゲムイースト村の人々にも 何か自分にできることを、と

私の父が所属する愛知県一宮市の 一宮中ライオンズクラブが2009年に創立50周年を迎え 記念事業として ケニアの無医村の視察に2夫婦と1名がアサンテナゴヤの皆さんに同行させていただき 村を訪れた際に 若い女性が大量に出血し緊急に町の病院に搬送せねばならない状況があり 乗ってきたタクシーで搬送したとのこと 無医村で電気や水道のインフラのない 僻地のこの村に車が必要だろうということで アサンテナゴヤを通じて ライオンズクラブより TOYOTAハイエースを送ることになりました。

そのご縁で わたくしは現在 アサンテナゴヤの会員になり また役員にもしていただきこの一年間 毎月の理事会に参加させていただき 医療従事者でない一般人の私が 一般人目線で ケニア ゲ



ムイースト村と 向き合って 今回のキャンプの準備を進めてまいりました。

車の次というわけでもないのですが 電気や水道の無いこの村には 衛生的な井戸や水が必要なのではないか？との声があり もちろん 現地の方からも 村人が共同で使えるような 井戸は求められています ケニアにも井戸掘りの業者さんはいるようですが 大変お金がかかる事業です もしも 手彫りでできるのならばということで 日本で井戸掘り体験に参加したりもしました また ろ過装置を開発してらっしゃる方にも個人的に岐阜まで行ってお会いしたりもしました。が しかし 今回のキャンプでは土地の所有の問題や 現地との話し合いも進んでおらず 井戸掘りは断念し 水質の検査をすることをひとつの目的にして 検査してまいりました。鉄 銅 亜鉛 ひ素 硬度 ph (ペーハー) 値 酸性 中性 アルカリ性 などを調べました。結果は 高い数値のものはみられず 井戸を掘っても大丈夫な地質 地域であろうという予想はできました。ただ 牛が放牧されていたりトイレなど (穴を掘っただけの) も 近くにあるため 微生物やアンモニア 細菌などは調べていないので ろ過装置や煮沸など タブレットの薬品で浄化はしないと 直接飲むのには 日本のようにはいかないかと、、、

一つの目的は水質の検査でした そして、もう一つは

GPSによる ゲムイースト村の場所の特定で スマートフォンのGPS機能を利用して 座標を調べてきました

-0.60764233 34.64845846 です。

この数字をGoogle EARTH MAPに入れるとピンポイントでできます。

この井戸に関する水質検査とGPSによる座標場所の特定の二つの目的は ぶじできました。

キャンプを通しては受付を担当させていただきました。病院に行く事はあっても こちらが受付

を担当するという事は初めての経験で つたない中学生英語で単語を並べて 現地ケニアのスタッフと やりとりし ゲムイースト村はルオ族 ルオの民族なので ルオ語を話す で通訳してもらい カルテをお渡しし 内科 小児科 皮膚科 歯科 鍼灸 各番号が振ってあるので 表にチェックし そこへ行っていただきました。また15歳以下のお子さんには 体重と体温のチェックがあり そこも 担当させてもらいました

最後に キャンプの最終日 20歳の女性がお腹がいたいと ドクターが診て お水が出た どうやら破水のように、妊娠7ヶ月で破水 とにかく町の病院に搬送しなくてはということで アサンテ号(ハイエース)で キシーの町の病院へつれていかれました わたしたちが 夕食をとっていると 連絡が入り 無事男の子の赤ちゃんが生まれたとのこと、、、実は7ヶ月ではなかったらしく それでも母子共に無事で大変うれしいニュースでした 5日間のキャンプでみなさんおつかれだったとおもいますが 思わず拍手と歓声が沸きました、、、

私がおとずれた前回の2010年の時も 高熱の幼児がアサンテ号で病院に搬送されて手当てをうけました。

2011 今回の2012と どうしても移動に使う現地の旅行社のバスの定員を考えると 20名ぐらいが 限度かとおもいます 当然ドクターが多い方がたくさんの村人を診る事ができます しかし 看護師さんや薬剤師さん



のように 医療に関わる方々の専門知識があつてこそ ちょっとしたことでも見逃さずに診療 診察が受けられ 薬を処方してもらえます また 即効性のある鍼灸は 日に日に口コミで広がったの

か?受付にいても 内科等のドクターを通さずにいきなりカルテをお渡ししたケースが増えました 内科で受診されたあと勧められて鍼灸を受けられる方も、、、歯科は 抜歯されてる方を多くみました みなさん喜んでらっしゃいました。設備や道具も限られたなかで 処置されてるのを拝見し すごいなと、、

僕のような例は たまたま まれなケースではありますが 何の知識も無い 英語力も無い 医療関係者でもない しかし 実際に2度もケニアには行っております。現地では、別にケニア入りしていた 日本人のお二人も合流して 一緒にキャンプをすごしました。人と人とのご縁は不思議なものです ケニアのボランティアスタッフの皆さんや 診察を受けにキャンプにやってきたゲム村の地域の人々。常日頃 もしも 20名の枠に 空きがありましたらば ぜひに、、、とおつたえしておりましたらば チャンスが巡ってきたのです。そして 誰かから聞いた言葉ですが ボランティアは自己満足 現地に行くに当たっては 目的を持っていくといい と村の人々に満足をしていただくことは なかなかむずかしいことかとおもいます けど せっかく 行くのですから 一つでも なにか だれかのおやくにたてるように そう考えて 今回も参加させていただきました。ぜひ アサンテナゴヤの活動に興味を持っていただけて 会員になっていただきまして いつかは ケニアに行くチャンスを そして 行きたい自分の主張を 隠さずに アサンテナゴヤの誰かにお伝えください もしかしたら いつのひにか 力をお借りし 日本では得られないなにかを感じてくることができるのではないかとしんじております。

また 2011 3、11の東日本大震災では 東北や広い地域で多くの方々が亡くなられ 被災された方々の生活は今もなお 大変な状況にあるときいています。

それでも 日本という国はいい国です おかしな所も見えてきます 毎日 政治や嫌なニュースも でも わたし自身 生活して暮らしていくのは 日本の国です 日ごろの生活を見直し 今できることは今 先延ばしにせずに あたえられたチャンスを大切に誠実にいきいていきたいと 感謝の気持ちを忘れずに ありがたいなあ と 自分を見直す機会を 今回もいただきました。

2回目のケニアということもあり 前回は表面的に上っ面を見ただけのようだったのが 今回は心の余裕もあり 少し深くケニアの都会の部分 田舎の農村地など を見ることができた

のではとおもいます。何が幸せかを決めるのは自分自身だから 誰かが決めることではないので スラムで暮らす人たちや 貨幣経済からはなれて自給自足に近い暮らしを営むゲムイースト村の人たち それぞれに しあわせに暮らしていつてもらえたならば 少し足りないであろう部分 医療やお薬 を とどけるだけにとどまらず そのことが 医療を受けるためにはお金が必要だから 農産物をお金に換えてとかどこかで 思ってもらって自立支援といえますか きっかけになってもらえたらいいなとおもいます。

皆さんのご協力 ありがとうございます。

3 回目の医療キャンプを終えて

内海 眞

9月15日の土曜日午前10時、すでに13日にケニアに向けて出発した先発隊を追いかけようと名古屋医療センターで鈴木医師と菱田歯科医師と待ち合わせ、3人で成田空港に向かった。成田から韓国の仁川空港を経由し、大韓航空のダイレクト便で仁川からケニアのナイロビに飛び立った。大韓航空は従来のドバイ経由のエミレーツ航空よりも安く、かつレッグスペースもやや広い感じで快適である。機内食も日本人の口にはマッチしているように感じた。従って、来年もこのルートを利用しようなどと考えながら、長い機内時間を何とか乗り切る。ナイロビには翌日の朝到着し、すぐさま先発隊の宿泊しているホテルに向か



った。ホテルに到着した時は、先発隊の皆さんは朝食の最中であつた。地球の裏側で仲間

のは、ちょっとした感動を与えてくれる。8時頃にチャーターした小型バスに乗り込み、昨年と同じキシイのホテルに向かった。8時間を超すケニア横断の旅で疲労は蓄積していたが、翌日には懐かしいゲム村の人々に会えると思うと精神は高揚していた。

翌日朝6時に起床し、朝食を済ませ7時半には小型バスに乗り込み目的地のゲム村に向かった。昨年と同じ懐かしい風景がゆっくりと流れて行った。1時間と少しでゲム村の医療キャンプ予定地に到着した。そこでは、現地ボランティアの人たちが診療所設営のためにテントを張ろうとしていた。昨年と変わらない懐かしい人々の笑顔と言葉がここかしこに溢れていた。握手と抱擁がケニアにきた実感を倍増させてくれる。素朴で純粋な心の持ち主との再会は、こちらの心を浄化してくれるように感じられるのだ。

5日間の無料医療キャンプは、内科医4人、小児科医1人、皮膚科医1人、歯科医1人、獣医師1人、薬剤師3人、看護師3人、鍼灸師2人、サポーター4人の計20名の日本人チームと現地ボランティアで始まった。それぞれが持ち場につき、自分に与えられた役割を一生懸命果たそうと努

力したように思う。途中体調不良になったメンバーもいたが、よく頑張ったと思う。1100 人を超す患者さんの診療にあたったが、あっと言う間の 5 日間だったように感じられた。HIV 検査も 200 名弱の人たちに実施されて、約 16%の人たちが陽性と診断された。彼らは現地 NGO のスタッフによって近くの、と言っても車で 40 分以上かかる診療所や病院に紹介される。陽性者に対する心理社会的サポートも NGO のスタッフの仕事である。今年初めて CD4 測定器を医療キャンプに持ち込んだ。ホテルに帰ってから測定するのだが、患者さんの病勢を判定することができるので大いに役立った。同じ測定器が近隣の病院にあったのが印象的であった。マラリア検査も約 150 名の患者さんに実施され、約 1/3 の人たちが陽性と診断された。やはりマラリアはこの地では最も多い疾患の一つである。手伝いに来ていた現地ナースが、患者さんのわずかな表情の変化をとらえてマラリアを疑ったのには感動したものである。往診にも出かけた。歩いて 15 分くらいの距離にある家を訪問したのであるが、そこには巨大な頸部リンパ節腫脹の女の子が息も絶え絶えで椅子に座っていた。貧血も存在し、右側肺の呼吸音は減弱していたので、血中の酸素濃度はかなり低くなっているだろう。増殖速度も速いらしく、おそらく悪性リンパ腫のうちでも悪性度の高いバーキットリンパ腫ではないかと思われた。彼女は早晚死を迎えるだろう。十分な化学療法も造血幹細胞移植もこの地では無理である。早期診断がなされ、適切な治療法が選択されれば治癒した可能性もあるのだが、それは先進国でのことでこの地では望みえない。仕方がないのだ。私自身もどうすることもできない無力感に襲われ、その場から逃げ出したくなったのを思い起こす。つらい現実である。最終日の夕方、ある女性が破水したとのことで、我々が以前に送ったバンに彼女を乗せて町の病院まで搬送した。たまたまこの時期は公立病院の医療者が待遇改善を求めてストライキをしてい

たので、ややお金はかかるが私立病院の産科へ運ばなければならなかった。もちろん現金が必要であったが、友人から個人的に預かったお金をそれにあてることができた。しばらくして男児が生まれたと連絡が入ったが、本当に嬉しかった。他者の不幸がつらく、他者の幸せが喜びとして感じられるのだから、私の中にはまだわずかな人間性が残存していると思いもしたが、逃げ出したくなったあの場面を思い出すとやり切れなくなる。ケニアはいろいろな体験をさせてくれるところだ。

HIV 感染の予防はこの村のもっとも重要で喫緊の課題である。現地 NGO のメンバーがそれなりの活動を展開しているが、まだ十分とは言えない。彼らの望みは、HIV 関連情報を提供し、カウンセリングや HIV 検査が可能な保健センターのような施設の設立である。HIV 予防のシンボリックな役割を担うことにもなろう。この村出身の牧師さんがまず土地を購入した。サッカー場を一回り小さくしたくらいの広さを有する土地で、幹線道路からも比較的近く、また学校にも近い絶好の場所にある。今年の医療キャンプもこの土地で行われた。近未来にこの土地に保健センターを設立したい。すでに設計図と見取り図は完成している。この秋にインターネットの添付資料としてケニアから送付されたのだ。残るは建設資金であるが、何とかかなりそうである。皆さんのご支援を切にお願いする次第である。

クリーンな水の供給も実現したい課題である。今年は各種水質検査を佐野さんが実施してくれた。我々が検査した範囲では、すべて問題なしとのことであった。現在は浅い井戸から飲料水をくみ取っており、それは時に濁っているのだが、深い井戸の掘削が実現すれば人々にクリーンな水を供給することができるだろう。これも 2 年以内に実現したい。

最終日に現地 NGO の幹部と議論したが、彼らは心から我々の活動に感謝してくれた。特に今回始めた歯科診療については、感動してい

た。なぜなら、彼らは歯科診療を受けるチャンスが皆無だからである。近隣に歯科医は存在しないし、仮に存在しても高額のために受診できないのだ。齲蝕などはこれまでどうしていたのだろう、と思う。来年も是非歯科医の参加を実現したいものである。

我々の活動は小さな活動である。1年に一度しか訪問できないし、彼らに送ることができる支援金も決して多くはない。途上国支援のプロから見れば、本格的支援からは程遠いと思われる。成果も未だ十分ではない。でも、我々はこの活動を継続していこうと思う。もちろん、大規模な支援グループとの協働が実現すればそのチャンスを活かそう。我々の歩みはゆっくりで小さなものであ

ろうとも、ゲム村の人々からの要請がある限り活動を続けていけば、いつかは花咲く時が来ると信ずる。

我々自身こそ、ゲム村の人々から教えられることが多い。素朴な心、それに接することの喜び、自己中心ではなく他者を思う気持ち、人生の充実とは決して物質的なものではなく精神的なものであることの教訓、協働の素晴らしさ、彼らのたくましく甘えのない生き方、運命を引き受ける従順な精神、そして自然の恵みに対する感謝など、我々が失いつつある心の在り方を学ぶことができる。60歳を超えた身にはなかなかハードな活動ではあるが、やはり私はケニアに一年に一度は行ってみたいのである。

素晴らしい出逢いを重ねて

理事（鍼灸師） 石川 佳子

今年も多くの皆様方のご協力により、ケニア奥地のゲム・イースト村にて無料医療キャンプを終えることができました。



今回は昨年までのエミレーツ航空に代わって、大韓航空を利用して仁川からの直行便でナイロビに向かいました。これまでに比ベトランジットの時間などの短縮により時間の余裕ができ、ナイロビでのキャンプの準備時間に当てることができましたし、チャイルドドクター・プログラムに参加することもできました。

毎年多くの感動があるのですが、今年は特に若い先生方をはじめとして参加して下さった方々のチーム連携が素晴らしかったです。私たちはナイロビに到着した日をキャンプの準備日と決め、全員で薬や食料品などの整理をし、必要な準備をしました。

参加して下さる皆様のご協力により、回を重ねるごとに少しでも効率よくキャンプを遂行

するためにいろいろと工夫がされるのですが、今年は薬剤部の混雑を緩和できないかといくつかの約束処方が用意されました。その準備に薬剤部の方々は勿論のこと、参加くださった若いドクターの方々も懸命に準備してくださいました。その光景を見させていただき、私はこのチームの連携の素晴らしさを実感し、今年の医療キャンプもきっと現地の皆さんに喜んでいただけると確信しました。そして、この連携は現地において最後まで続き、診療中は勿論のこと、宿舎での食後毎夜遅くまで翌日の薬や食事の準備に協力してくださいました。大変お世話になりました。

私たちの活動は、現地ケニアで活躍されている方々のご協力なくしては成り立ちません。

今年はナイロビのスラム地区にてチャイルドドクター・プログラムの活動をされている宮田久也さんと、公文和子先生のお世話になりました。私たちはお二人とは数年前から親交を深めてさせていただいています。

チャイルドドクターという言葉は、アフリカのある村で見た光景から生まれたとのこと。そ

の村には医師はいませんでした。医師の代わりにコミュニティヘルスワーカーの女性が村人の世話をしていました。村人は皆、その女性を「ドクター！」と呼んでいたそうです。医師であっても、医師でなくとも、自分達の健康に関わってくれる人々を尊敬の念を込めてそう呼んでいたのです。そうした理由からこのプログラムに参加する人々、支援をしている人々すべてを「チャイルドドクター」と呼ぶとのことでした。

スポンサーシッププログラムでは、月々1000円の支援で子ども達がいつでも医療を受けることができるようになります。支援する人と支援される子どもが1:1で結ばれていますので、子ども達の存在は、支援している側にとっても大きな心の拠り所となっているそうです。チャイルドのことがテレビで放映されたこともあり、スポンサーのほとんどが日本人だということです。このプログラムの詳しいことをお知りになりたい方は是非、チャイルドのホームページをご覧ください。

スラム地区の見学をさせていただく前に、公文先生からはミニレクチャーをしていただきました。

移動診療の限界から常設クリニックを開設したことや、無料であることは都市部では悪用されることがあるため有料とし、1回100ケニアシリングの受診料、原価の薬代を負担してもらうようにしており、その費用をチャイルドドクターのスポンサーの方々をお願いしていることなどをお聞きしました。

公文先生からはケニア国内の保健体制のお話もお聞きすることができ、私たちアサンテ ナゴヤが今後進むべき道が見えてきたような気がしました。それぞれの地域のコミュニティとの連携がとても大切なことを再確認させていただきました。

日本人スタッフの方にスラムを案内していただき、スラムの現状を見せていただくことができましたが、日本人が見学をさせていただいた家庭

が後で襲撃されることがあるという悲しい事実も教えていただき心が重くなりました。今後の日本人の見学は検討されることになるかもしれないとのことでした。

私たちは今回、キャンプで使う医薬品の一部の購入をお願いしました。ご協力に心より感謝致しております。チャイルドの皆さんとは今後とも大切なおつきあいをさせていただきたいと考えております。

私たちはまた、ケニアにて JICA 関連事業で活躍されていらっしゃる沢崎さんにも大変お世話になりました。ゲム・イースト村近くの出身の青年2人を引き合わせてくださいました。今後彼等ともうまく連携が取れるといいなと考えております。

今回の医療キャンプがスムーズに遂行できたのは、坂光理事が現地の NGO のスタッフと丁寧に根



気よく E-mail のやり取りをしてくださったおかげです。また、ケニアで活躍されている方々にお会いできたのは、アサンテの事務局を担当してくださっている岩崎さんが現地の方々と綿密に連絡を取ってくださったおかげです。岩崎さんには毎回のキャンプの準備を周到にいただいています。いつもありがとうございます。

現地での鍼灸治療も3回目となり、最初は怖怖（だったと思われます）であった治療もかなり現地に浸透してきたようで、この頃では痛みの症状には「アクパンクチャー」と、受付で最初から鍼灸治療を指定してくる方も増えてきました。今年は学校の先生が長期ストライキをしていたので、学校が休校状態となり、キャンプには多くの子ども達の姿がありました。鍼灸にも10代前半の患者さんが5~6人受診し、その症状のほとんどが腰痛であったのには少し驚きました。

今回は鍼灸部門で新しい試みもしました。兎山

俊浩先生が中心となり、現地の患者さんの健康面における自立支援になればと、お母さん向けに小児鍼教室を開きました。沢山のお母さんや子ども達が参加してくださり大盛況でした。この小さな種が来年、芽を出してくれているといいな、と思っています。

今年は昨年のように参加してくださったほとんどの方々が体調を崩すということもなく、夜の食事は皆さん美味しそうに召し上がってくださっていましたのでホッとしました。でも、やはり数人の方々が体調を崩され辛い思いをされて申し訳なく思っております。日差しの強い現地でテントでの医療キャンプは、熱中症に対する対策も必要と痛感しました。次回以降はその対応もしていきたいと考えています。

キャンプの最後に、内海先生と私は現地の人々とお話する機会をいただきました。現地の方々が私達の活動にいかに関心されているか、そしていかに期待されているかヒシヒシと感ずる時間でした。

今年初めて、歯科の治療が行われました。ケニアの人々にとって歯科治療は高嶺の花で、一生の間に歯の治療を受けられない人達がほとんどだそうです。ですから、現地の皆さんはとても感謝されていました。菱田純代先生の手際よい治療を時々垣間見せていただいていたいました。先生に心より感謝致します。

現地の方々が熱望されているのは、クリーンな水と保健・医療の拠点となるコミュニティセンターの建設です。水に関しては、佐野役員が近くの井戸、川などの水質検査をしてくださり、砒素な

どの危険はないことが判明しました。掘削に向けて一歩前進です。

コミュニティセンターは地域の健康面での自立のために是非とも必要なものであらうと思われます。

そしてその建設・運営には地域の人達の協力が不可欠です。このことは、チャイドクの公文先生のお話からも良くわかりました。地域の人達が必要としているものを地域の人達と連携して築き上げていくということです。

幸い現地には、ルーネルドという素晴らしいNGOがあります。私たちがキャンプでHIV抗体検査をした後、陽性者のフォローアップは彼等が引き受けてくれています。今後、コミュニティセンターができあがれば、そのような役割を果たす場所になることでしょう。

その準備は進みつつあります。現地のまとめ役でいらっしゃる方が土地を購入され、センターの青写真も出来上がっています。あとは資金の算段です。建築のための助成金も申請することにしました。

今年のキャンプでも素晴らしい方々との出逢いがたくさんありました。さまざまな経緯でこのキャンプに参加してくださった方々に心から感謝申し上げます。そして、毎回参加してくださり重要な役割を果たしてくださっている方々、現地で協力してくださった方々、キャンプの準備にご尽力くださった方々、私たちアサンテ ナゴヤを支えてくださっている全ての方々にも心からお礼を申し上げます。今後ともご理解・ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

ゲム村のコミュニティと日本

河原 孝

今回、一番刺激を受けたのは村人の人柄でした。村人はとても純粋な表情でよく笑顔を見せてく

れます。そして話しかけるととても明るく返答してくださいます。コミュニティを大切にし、そして一人ひとりを大切にしたい人がいたら助け合って生きているのが伝わってきます。

しかし服や靴がボロボロの人たちもよく散見さ

れます。服や靴を買いに行くお金がないのでしょうか。しかしそのような人も、皆なぜか明るく、そして良い綺麗な笑顔を見せます。明らかに毎日同じ服を着ている子供たちも常に物凄く目を輝かせています。電気はありません。もちろんテレビもないでしょう。井戸もないので遠くまで水汲みにいきます。この村には貧乏な人はたくさんいますが私の目には貧困は見あたりません。

かつて明治維新が終わったすぐに日本に来たアメリカ人も日本を見て同じことを言ったそうです。コミュニティを大切にし、一人ひとりを大切に、周りが助け合い、そして純粋に生きることを楽しむ。そのような時代が日本にもありました。もしゲム村に産業が生まれ、経済的に豊かになっていったらこの素敵な村の人々はどうなっていくのでしょうか。そうなればいつでも病院に行けます。いつでも好きな物を買うことができます。趣味をもつことも旅行に行くこともできます。



助け合わずとも一人ひとりで生きていくことが可能になるかもしれません。しかしコミュニティはどうなるのでしょうか。もしかしたら今よりも一人ひとりのコミュニテ

ィの関係性は弱くなるかもしれません。その関係性が弱くなったのが今の日本の状態だと思います。物質的に豊かであり、しかもコミュニティの関係性が強いのであれば今の日本の一つの問題である自殺も減るのではないのでしょうか。

今回の医療キャンプではこのコミュニティの重要性という一つの大切なことに気付かせていただくことができました。

医療キャンプが終わった今、私はケニアの隣の国ウガンダにいます。このウガンダでもお金がない人たちがたくさんいます。

しかし、お金がなく病院に行けずにもし誰かが死にそうになったら誰かが絶対に手を差し伸べます。

これがアフリカなのです。しばらくはこちらでコミュニティについてを学び自分にできることを探していきます。

今回、このような貴重な機会を作ってくださったアサンテナゴヤの皆様、並びに医者でもない僕を暖かく受け入れてくださった今回のキャンプメンバーの皆様、現地NGOのルーネルド、そしてゲム村の皆様に心より感謝申し上げます。

無料医療キャンプ スタッフ紹介

東京	沖縄	名古屋	
菊地正：感染症医師	内海大介：皮膚科医師	河原孝：スタッフ	讃岐珠緒：薬剤師
山内雅史：総合内科医	飯田展弘：小児科医	鈴木純：総合内科医	玉木奈美枝：看護師
渋谷伸子：薬剤師	長崎	菱田純代：歯科医	岡本裕子：看護師
石川博司：薬剤師	水谷裕子：獣医師（検査）	内海眞：内科医	日比野福代：看護師
石川美里：スタッフ		児山俊浩：鍼灸師	佐野考宏：スタッフ
		石川佳子：鍼灸師	岩崎奈美：スタッフ

ダグラス・レポート(ルーネルド代表)

医療キャンプのケニアにおけるパートナー、RUNELD からキャンプのレポートが届きましたので、ここにご紹介いたします。

2012年9月17日から21日までRUNELDとアサンテナゴヤが実施した医療キャンプのレポート

I 序論

Rural New Life Development(RUNELD：農村の新しい生活の発展)とアサンテナゴヤは9月17日から21日まで毎年恒例の第3回医療キャンプを実施し、大きな成功を収めました。

RUNELD の理事会として、この慈善行事のために医療品の供与や財政的援助といった多大な貢献をして下さったパートナーやサポーターの皆様方に心から御礼申し上げます。

この報告書は、主要な業績と皆様のご意見から学んだことを記載いたします。RUNELD は、これからも医療キャンプを実施していく上で、組織としてこれからも進歩していくために、皆様のご意見をお待ちしております。RUNELD は、2013年9月にゲムイースト村で実施される次回の医療キャンプの計画を進めています。そして次回も、キャンプの成功のために皆様方の援助を頂きたく存じております。具体的日程はアサンテナゴヤから近々に連絡があるでしょう。

II. 2012年RUNELD／アサンテナゴヤ無料医療キャンプの基本方針

今回のキャンプの主目的は、これまでの医療キャンプと同様、ゲム村の人々に医療を届けること、健康に関する情報を伝えること、そしてゲム村の健康上の問題点を定義して、地域の役所と連携しながら、問題に取り組む方法を検討することにあります。具体的には、村にVCT（自発的カウンセリングとテスト法◆HIV抗体テストや感染予防カウンセリングなど自主的に受けるエイズ予防プロジェクト）を供給すること、村人全体に対して予防的および治癒的医療を供給すること、特別な治療を要する患者を関連機関に紹介すること、HIV/AIDS・梅毒・淋病その他の病気についての関心を喚起しカウンセリングを行うこと、眼科や歯科の疾患のような深刻な機能障害をもたらす病気を予防するために衛生状態の大切さを啓発することです。こうした疾患は埃や不潔な水のためにこの地域で良く見られるものです。無料医療キャンプでは地元で取れる栄養価の高い農産物を食べることを促進すること、そして村人への薬物依存を減らすことも目指しています。

さらに医療キャンプは、時間、労力、専門知識を提供することによって、医療従事者もそうでない者も共に村に報いることができる機会となっています。40人以上の男女が、自分の仕事を休んで、各人の能力を活かして全5日間を貧しい人たちに奉仕するために費やしました。こうしたボランティアの人たちの力があつたからこそ、医療キャンプは大きな成功を収めることができました。

III. RUNELD／アサンテナゴヤ医療キャンプの業績

村の人々は会場に毎朝6時にはやってきて、列の先頭に並ぼうとしました。そして午後4時30分まで人々はひっきりなしにやってきました。RUNELDとアサンテナゴヤは、様々なサポーターの援助を通じて、約1500人の患者を受け入れ、様々な医療を提供しました。医療キャンプの成功はアサンテナゴヤによってもたらされた高い水準の医療と薬剤に加えて、RUNELDのスタッフとナイロビとゲム村から来たRUNELDボランティアメンバーの協力によるものです。

アサンテナゴヤは医療キャンプの主要なパートナーで、1500人の患者の需要に応じるのに十分な薬剤

を供給してくれました。アサンテナゴヤの医師、小児科医、看護師、鍼灸師そして歯科医は午前 9 時から午後 4 時 30 分まで簡単な昼食を取るために少し休憩する以外はノンストップで働きました。彼らの愛と医療に心から感謝しています。彼らは地元の人々が医療を必要としていることを理解し、次の医療キャンプにも参加することを約束してくれています。

無料医療キャンプが構想されて以来、RUNELD とアサンテナゴヤ事務局は、経験から学んだことに基づいて、キャンプの効率と有効性を高め続けてきました。医療キャンプはよく組織されていて、キャンプ計画のための定期的なミーティングが開かれています。役割と責任の明確な分担は理事の全員の合意に基づいていますし、実際初日から多くの人たちが 4 時半までしっかり働いていました。キャンプの間、患者の流れがしっかりとできていて、そのことは記録を取ったり薬局で薬を出したりする際に特に役立ちました。

RUNELD はサポートしてくれるパートナー全員に必要な物質的援助もまた提供しました。

医療キャンプで提供されたサービスは以下の通りです。

歯科

全ての年齢の人たちへの診療

障害のある人たちの要請を聞く

眼科

V C T

皮膚科診療

生活上の衛生や栄養についての啓発

アサンテナゴヤがゲムイースト村で無料医療キャンプを実施する目的は、村の人たちに医療を提供することと健康情報をもたらすこと。そしてコミュニティ共通の健康問題を明らかにして、その問題への対応を検討することです。

医療キャンプの目的

VCT の提供

村で必要としている予防および治癒的な医療を提供する

特別な治療を必要とする患者を関連のところに紹介する

HIV/AIDS、糖尿病その他疾患に関する、健康についての話をする。

病気の予防と対処についての情報提供

衛生的な生活を続けることが深刻な目の病気の予防に役立つことを教える

地元で取れる栄養のある農作物の摂取を促進

村の中での薬物中毒をなくす

衛生的な生活を続けることが歯の関連の問題の予防に影響することを教える

IV スポンサーとパートナー

生活費、とりわけ医療費の高騰によって、村人が薬や食べ物を入手することがより困難になっています。だから民間、公共、個人の出資者がケニアの社会福祉をよくするために力を合わせるものが求められています。彼らの協力が政府の努力を補うものとなるでしょう。そして貧しい人たちの生活を大いに変えることになるでしょう。

RUNELD とアサンテナゴヤの医療キャンプの成功は全てのパートナー、地元の役所、ゲムイースト村



のコミュニティ全体のサポートがあつて初めて成し遂げられたものです。とりわけ 2010 年に RUNELD に自動車を寄付してくれたライオンズクラブは特筆に価します。

V 課題

RUNELD はゲムイースト村地域での毎年の無料医療キャンプをこれまで 3 年間実施してきました。キャンプを実施する度に課題や教訓がはっきりします。今回の医療キャンプにおいては、以下の事柄が、購買、全体の計画そして管理面での将来の課題と教訓として認められました。

時として、患者の数があまりに多く、医療者の負担が限界に達してしまった。ボランティアが大いに力を合わせたことで、スムーズにこなすことができた。

言葉の壁によって、時としてコミュニケーションが難しかった。特にボランティアの何人かが医療者に対応を任せてしまったときに。

キシイとキャンプ地が遠いので、キャンプは 4 時 30 分に閉じなくてはならなかった。医療チームとルーネルドのメンバーがホテルに戻る必要があつた。

VI よかったこと

テントとベンチを追加購入したことはキャンプの成功に大いに寄与した。

それぞれに名札を供給したことで参加者の名前がとてもわかりやすくなった。



VII 謝辞

医療キャンプの成功の要因は RUNELD とアサンテナゴヤの積極的な関与と参加が第一に挙げられます。RUNELD とアサンテナゴヤは少しの忍耐と強い意志があれば不可能はないと信じています。

アサンテナゴヤとその代表の内海眞医師には特に感謝申し上げます。医療キャンプが実際うまくできたのは彼らの努力のおかげです。私たちはアサンテナゴヤがキャンプのために提供して下さった技術的、医療的なサポートに深く感謝します。これは村の福祉の向上に大いに役立ちました。アサンテナゴヤは多くの人にとって本当に励みになりましたし、今後の医療キャンプにおいても引き続き援助して下さいることを期待しております。

医療キャンプは団結と信念の力を本当に証明したものでした。効率的な医療的人員配置計画から医師が必要な薬剤を適切に揃えることまでの全てが、RUNELD のスタッフと会員の献身と誠実さ、そしてアサンテナゴヤのスタッフの献身と勤勉さによるものでした。彼らのたゆまぬ努力と貢献は賞賛すべきものです。

最後に医療キャンプは、キャンプにやってきた患者と同様に医療スタッフがいなければ決して成功しませんでした。皆さんに本当に感謝します。村をよりよくするためにこれからも協力していけることを願っております。



追伸

RUNELD はアサンテナゴヤと協力関係が続いていることに本当に感謝しています。この協力関係をより高くより新たなレベルにしていけたらと存じます。本当にありがとうございました。

2012 年度 無料医療キャンプ 行 程 表			
9/13 (木)	13:35-15:35	中部国際空港⇒仁川 (乗り継ぎ)	長崎・沖縄組合流
9/13 (木)	22:15-	仁川	東京組合流
9/14 (金)	05:30	ナイロビ着	ナイロビ滞在 ホテルにてキャンプ準備 夕刻：JICA 沢崎氏、現地青年 2 名との情報交換会
9/15 (土)	08:00-14:00	チャイルドドクタープログラム見学	宮田氏より薬剤受け渡し
	15:00-19:00	ナイロビナショナルパーク見学	
9/16 (日)	08:30	朝食後キシへ出発	早朝滞在ルルにて、15 日出発 内海、鈴木、菱田先生合流。 讃岐氏、ダグラス合流 昼食：30 名 (ナロック) ナイロビからのボランティア スタッフと昼食場所で合流
	17:00	キシ到着 (キシ泊)	河原氏合流
9/17 (月)～9 月 21 日 (金)		GEM EAST (キシ泊)	無料医療キャンプ
9/22 (土)	8:00～15:00	キシ⇒ナイロビ (陸路)	宮田さん、沢崎さんと青年 2 名、ルーネルドスタッフを交 え、意見交換会
9/23 (日)	10:30-	ナイロビ⇒仁川 (乗り継ぎ)	
9/24 (土)	12:25	中部国際空港到着	

2012 年度 無料医療活動総支出

	日本にて支払い	現地支払い	合計
交 通 費	2,897,566	42,065	2,939,631
謝 金	50,000	80,683	130,683
医 療 消 耗 品 等	423,812	82,846	506,658
テ ン ト ・ 椅 子 ・ 机		157,640	157,640
医療以外消耗品及び食材費	38,773	293,962	332,735
雑 費	12,130	18,637	30,767
	合 計		4,098,114

為替レート

1 \$ 81.68

1Ksh 0.89

* ビザ取得 (ナイロビ 空港) US \$ 50 は自己負担といたしました。

お 知 ら せ

*** 第 25 回愛知サマーセミナー参加**

日時：平成 25 年 7 月 13 日（土）～15 日（月）（予定）会場：未定

*** 2013 年度の渡航は 2012 年 9 月 12 日（木）～9 月 23 日（月）を予定しています。**

無料医療キャンプ、井戸掘削、子ども達の支援の継続に今後ともご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

*** 認定 NPO 申請中（平成 24 年 12 月 12 日申請書提出）**

名古屋市の 2 回の諮問を受け、その後審査。3 月末頃に審査結果が出る予定です。

*** モリコロ基金申請（平成 24 年 10 月 30 日申請書提出）：無料医療キャンプ資金**

1 月末に第一次審査の結果がいただける予定です。（二次審査は 3 月上旬の予定）

*** 国際協力 NPO 助成申請（平成 24 年 12 月 13 日申請書提出）：コミュニティセンター建設資金**

残念ながら、今年度は助成を受けられませんでした。

*** 会費、賛助会費、協賛及び寄付金をいただいた企業・団体および個人（敬称略）**

（平成 24 年 7 月 4 日から平成 25 年 1 月 10 日までにご支援をいただいた皆様です）

（株）ミアルカ・青木孝夫・青木孝・青山真夕・青山純也・石井圭子・石居尚子・石川博司・石川美里
一宮中ライオンズクラブ・岩田みつ・内海みどり・内海大介・井上真里・井上由記恵・石黒博人・飯田展弘
今枝美穂子・岡田はるみ・大岩洋子・木下博・岡本裕子・稲垣やよい・小川多恵子・小川賢二・奥村啓子
小木曾悠紀子・小木曾義治・山田洋平・片岡紀子・片桐初男・加藤広子・川合香名子・河野サトコ
木下ゆり・グラクソ スミスクライン（株）・帰来堂・栗村道夫・ジョイハンズ（児山俊浩）・ジョイハンズ
小菅哲・榊原純夫・佐藤円三・佐野朝江・佐野春臺・椎野誠一・椎野節子・塩井健介・柴田益江・渋谷伸子
杉本みな子・杉江修二・杉崎卓也・鈴川温子・鈴木純・住友正武・住友光子・高山睦枝・武井愛実
竹田健二・玉木奈美枝・土屋二郎・田中由紀子・出村初枝・土屋久仁子・富田道・中島知緒・中野朋義
橋本真友子・中林春壹・西山英子・野々山洋子・野村浩子・長山毅・滑川正雄・西尾彰泰・菱田純代
服部敬司・平野雪夫・深川善治・日比野公治・日比野丈夫・日比野福代・日比野裕士・松原夫佐子
水谷裕子・見田くるみ・光川千鶴子・美濃和茂・山田多恵子・山本直彦・山本由紀・藪下彩子・森岡悠
ユニバーサル基金・脇田かおり・川田初美・市野健二・（有）ヤマフ土地・A01 募金・石川佳子・内海眞
森下理香・坂光信夫・佐野考宏・宮本信代・岩崎奈美

編集後記

今年も皆様のご理解とご支援により、無料医療キャンプを開催、無事終了できました。ありがとうございました。大韓航空を使用したことで、参加者で事前の準備、打ち合わせが可能でした。そのお陰でチームとしてまとめ、スムーズなスタートでしたが、キャンプ全体を見直しますとまだまだ改善が必要です。参加者の方、会員の皆様のご意見を反映させていただき所存です。お気づきの点を是非事務局までお知らせいただき、様々な形で当会の活動をご支援ください。どうかよろしくお願い申し上げます。

岩崎

事務局：名古屋市東区葵 1-25-1 ニッシンビル 906 TEL/FAX：052-933-1588

ホームページアドレス：<http://asante-nagoya.com>

フェイスブックアドレス：<https://www.facebook.com/asante.nagoya>